被覆肥料の被膜殻流出防止対策実証ほの結果概要

１　結果の概要

・早生品種では４か年ともに収量指数100以上であり、代替肥料でも同等の収量となる。
・中生品種では94（4か年の平均）と収量がやや低下するが、穂肥追肥や基肥を増施することで同等の収量確保が可能。
・晩生品種では93（3か年の平均）と収量が低下する。基肥増施や追肥をしても平均93(R5)であり、対照と同等の収量確保に至らないが、穂肥の量や時期によっては、平均96(R6)、105(R7)となり同等の収量確保が可能。

２　具体的データ

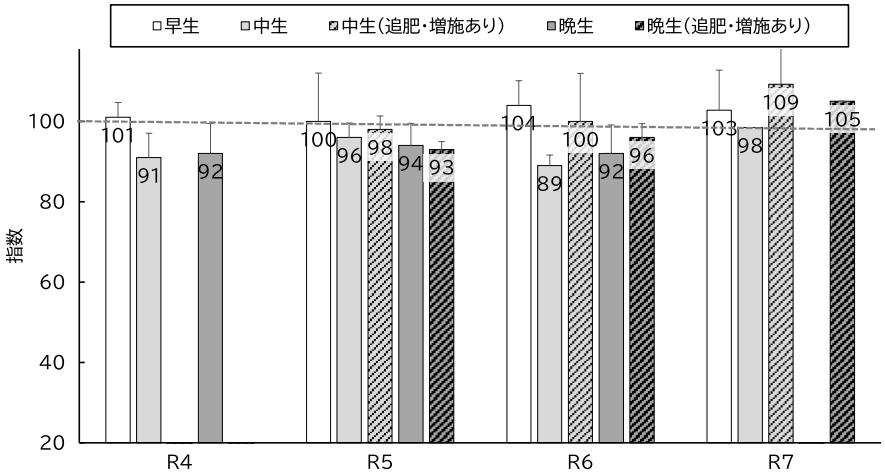


図　実証区の精玄米重
（プラスチック被覆肥料を100とする指数）

表　実証区の精玄米重
（プラスチック被覆肥料を100とする指数）

実証区	R4	R5	R6	R7
早生	101	100	104	103
中生	91	96	89	98
中生(追肥･増施あり)	-	98	100	109
晩生	92	94	92	-
晩生(追肥･増施あり)	-	93	96	105

※実証は以下の品種で実施
・早生（コシヒカリ、あきたこまち、ヒメノモチ等）
・中生（きぬむすめ、ヒノヒカリ等）
・晩生（アケボノ）